



# 文は信なり

日本クリスチャン・ペンクラブ（略称JCP）発行・責任者 池田勇人  
事務局 〒131-0043 東京都墨田区立花4-6-13 三浦喜代子方  
TEL&FAX 03-3616-8621 郵便振替 00170-0-161838  
ホームページアドレス・<http://jcp.daa.jp>

## 主題【海】による作品特集号

2006年最初のレターは会員の作品を集めました。  
主題【海】を掲げて、思い思いに書き合いました。

主題メッセージ・月夜の海に浮かべれば

JCP理事長 池田勇人

2006年が始まりました。皆様がいかがおすごしでしょうか。本年の標語は「癒されて証する」としたいと祈っています。

『あなたの家、あなたの家族のところに帰り、主があなたに、どんなに大きなことをしてくださったかを知らせなさい』（マルコ5・19）がみことばです。

ガラサの出来事を告げ知らせた幾組かの人々がいます。直接見ていた者たち、豚飼たちの告知は表面的なもので、結局救い主を追い出してしまったのです。それは彼らの心が癒されないうままだったからです。けれども癒された狂人の証は、喜びと感謝、確信に満ちていましたので、再びイエス様が来られた時に人々が押し寄せる（6・53）もとなつたのです。

私共も主に癒された者として、み声を聴きつつ、あかし文を紡いでまいりましょう。

唄を忘れた金糸雀は 後ろの山に捨てましょか

いえいえそれはなりません……

唄を忘れた金糸雀は象牙の船に銀の櫂

月夜の海に浮かべれば 忘れた唄を思い出す

『赤い鳥』誌の中で、楽譜付きで最初にヒットした西條八十の「かなりや」です。家庭の経済事情により詩作から離れていた八十を、創刊者鈴木三重吉が訪ねてきます。ぜひ童謡の選者にと。唄を忘れていた者が再び唄の世界に戻れる喜び。招いてくれた恩師への感謝があふれ出て、この唄になりました。さらに幼少のころ、母に連れられて出席した番町教会のクリスマスの思い出も見え隠れしています。考えてみれば私共の証も、どのように表現したらよいのか惑ったり、感激がうすれて賛美の心を失ったままでもいたりする中からの、無味乾燥な言葉の羅列はなかつたでしょうか。救いという象牙の船に乗せ、奉仕の賜物という銀の櫂を握らせてくださり、神の国のさざ波光る月の海に浮かべてくださるキリストとともに、この年も歩んでまいりたいものです。

「主よ、タラントの小さを訝しく思わず、健筆の友を妬まず、

あなたの月夜の海で私の傷を癒してください」

## 目次

\*\*\*\*\*

月夜の海に浮かべれば 池田勇人1 / 三位一体のいのちのお  
くつき 川上与志夫2 / 深い海の底に 島本耀子3 / 果てし  
ない存在 駒田隆4 / 海の唄 北川静江5 / 原点に帰る 坂  
口良彬6 / 海の思い出 藤田和範7 / 海を渡る 小川恵子8  
 / 海との出会い 内海健寿9 / 海まで26・5キロ 山本披露  
武10 / 辻堂海岸で 西山純子11 / 不安の波 島田裕子1  
2 / 海に沈めて 三浦喜代子13 / 天からの恵み 長谷川  
和子14 / 鳩のうみ 木村隆一15 / 詩と俳句玉木功・小林桂  
子・浅見鶴蔵16 / HP 管理人から 島田裕子17 / ブロック  
活動報告・中部18・関東・関西19 / 本部事務局便り20 /

\*\*\*\*\*

## 三位一体のいのちのおくつき 川上与志夫

海は怖い。

あの濃い藍色。底知れぬ深みは、魔物たちの絶好の隠れ家。大きなうねりは魔物のうごめくあかし。うねりは岸に向かい、岸近くになると、波に姿を変ええる。そして、不気味な唸りを響かせながら、岸に打ち寄せる。

波はいくつもの表情をもつて、人を惑わす。時には怒り狂う龍の雄たけび。時には、たくましい若武者の武者震い。時には、優雅に舞う乙女の裳裾(もすそ)。時には、子をあやす母の子守唄。

散歩のコースに浜辺がある。気が向くと、足をのぼして海に向かう。海は波打ち際がおもしろい。

海の色。波の音。足元のさざ波。その一つひとつが、

そこにたたずむ人の心に、千差万別に語りかける。時には、悠久の昔の、いのちの息吹。時には、恐ろしい海神の物語。時には、海に沈んだ者たちの物悲しい語り。時には、父母のなつかしい声。

海は聞き入る人を、沖の深みに連れ去る。

海は怖い。

それなのに、なぜか海はなつかしい。

いのちの揺りかごだからだろうか。

人は海から多くのいのちをもらう。魚介類、海藻類。そして塩と水。海は体のふるさと。だから、心もそこに惹かれる。

神は土で人形を創られた。人形の素材はちりと水。その人形に、神はご自分の息を吹き込まれた。人形はいのちある人となった。

土と水と息。大地と大海と大気。三位一体のいのちには、神の霊が息づいている。私の体が神の宮であるゆえんである。すばらしいことだ。もったいないことだ。そして、怖ろしいことだ。

人は死ぬと、体が焼かれる。体の一部は大気になる。一部はつぼに入れられ、やがては大地にもどる。私は遺骨の大部分を大海原に流してもらおう。

三位一体は、どこまでも三位一体でありつづけるだろう。大気に舞い、大地に安らぎ、海原に漂う。

いのちには、それ以外のありようはない。海は怖い。それなのに、やっぱり海はなつかしい。

## 深い海の底に

島本 耀子

三浦綾子さんの長編小説「海嶺」は、江戸時代の3人の水夫の物語である。

鎖国時代の船は遠洋航海ができない構造だった。その千石船が遠州灘で嵐に遭って漂流した。長編を詳しくは述べられないが、1年余りでカナダに漂着。生き残った水夫はわずか3人。彼らの帰国は生涯叶わなかった。

嵐の海で逆巻く波に翻弄されながら、「船魂様あ」と必死に叫び求める少年水夫。その「船魂様」の本体は女性の髪の毛なのだ。作者は、

（そんなものに縋っても駄目なのに）

とは言わないが、無益なものに頼る哀れさが切々と、読む者の胸に迫る表現である。

「海嶺」とは、海底にも地上同様の山も谷もある。だが、その姿は隠れて見えない。そんな、埋もれた人の生き方を描いた作品だと聞いて私は読む気になった。そのころはまだ、教会に行こうと思っただことさえなかった。3人は様々な出来事を経て、聖書の日本語翻訳に関わることになる。

「ハジマリニ カシコイモノゴザル」

小説の中の一言が、これほど長く私の中に留まったことは他にない。後に私も聖書を手にしたとき、まさに名訳だと改めて感じた。真理を知った人は賢くなる。水夫は、畏むべき神を知ったのだろう。

それにしても、この作家のなんとこの素晴らしさ。説教をしているわけではないのに、神様を語っている。そ

して、無関心だった私でさえ今、なんとか証を書こうと  
しているではないか。

私の父は最期まで信仰の証しには至らなかったが、キリスト教に関心を寄せていたと後で知った。父は、人の手によって作られた偶像は認めない人だった。兄の成田山の守り札が割れたとき、「それはただの木切れだ」と、慰めてくれる。そして私にも、先祖の位牌を求め、火事で燃え盛る火の中に飛び込んだ人の話が、美談とは思えない。哀れなだけなのだ。

神様は私のすべてを知っておられる。すべてのことは、神のご計画の中で運ばれてきた。私は今それを実感している。

若いころ、よい事はすべて自分の努力の結果だと自負したときがある。しかし、神の恵みなくして、私に何ができただろうか。ただ、隠された真実を知らなかっただけ。

あの千石船に何人乗り組んでいたか憶えていないが、生き残った3人は神に選ばれた人。そして、神の手に導かれて聖書の翻訳に加わることができた。このギュツラフが著した日本語訳聖書は、栄えある第1号なのだ。

あの海嶺の谷底に横たえられた人たちは、世の光から遠ざけられた。私の過ぎてきた道にも、様々な危難があった。だが、私は今、主によって生かされている。

この先、見えない海の底に何が待ち受けているとも、主の道を歩いて行こう。それが、主によって備えられた私の道なのだから。



## 果てしない存在

駒田 隆

教皇グレゴリウス一世は、海を「永遠の死の淵」と呼んでいます（『聖書象徴辞典』65ページ\*マンフレート・ルルカー著／池田絢一訳\*人文書院・1988年、聖書の中では、海を恐れとして表現している箇所はかなりあるようです。ヨブ記には、海の底が死者の国と結びつき（ヨブ記38・16～17。新共同訳による、以下同じ）、イザヤは、「災いだ、多くの民がどよめく、どよめく海のように」（イザヤ書17・12）と歌っています。

しかし、神は、海もまた、良しとされていたのです（創世記19～10）。確かに、海は、わたしたちに恵みをもたらすと共に、災いをもたらしています。海は、わたしたちに両面の姿を見せています。どちらの姿を見るかは、それは、わたしたち人間の受け止め方ではないでしょうか。海の一面の姿で、海のすべてを見ることができません。海は広いのです。そこからわたしたちが知ることができるのは、ほんの少しでしかないのです。生命の源と言われる海は、わたしたちに、その果てしない姿を見せています。人間の限りある知識で、すべてを解釈することはできません。わたしたちは、海がどうしてできたか、と学ぶことはできません。観察し、実験を重ねて、海の生態に迫ることはできません。

しかし、海は、どうしてあるのか、存在しているのか、ということには神の御心ではないでしょうか。そして、その海を人々がどのように捉えるかは、その人の心、存在意識によるのではないか、と思います。そのために、人々は、海をさまざまに見てきました。海のもつ姿を、その人の心に映して見てきたのです。

詩人茨木のり子は、「海を近くに」と題する詩の中で、

海がとても遠いとき

それはわたしの 危険信号です

わたしに力の溢れるとき

海はわたしのまわりに 蒼い

お前海よ！ いつも近くにいて下さい

シャルル・トレネの唄のリズムで

七つの海なんか ひとまたぎ

それほど海は近かった 青春の戸口では：

（「おんなのことは」より\*真話屋・1994年）

と歌っています。この詩の中で、彼女は、海との距離を、自分の人生の生き様に反映しています。果てしない海が、近くに見えたとき、それは青春という真ん中にあり、遠く見えだしたとき、老いという時につながっているのです。しかし、詩人は、海を自分のそばで見たい、という願いを込めて歌いました。トレネの唄に合わせて自分も歌いたい、そんな気持ちが海を近くに引き寄せているのです。海は、恐れる存在ではなく、自分を表す存在でもあったのです。神が良しとされた、その存在に自分を重ね合わせたのではないのでしょうか。海は、穏やかな姿を見せるだけではありません。ときには、凄まじい姿を見せます。しかし、それも、一つの姿なのです。海を海として見たときに、海は、わたしたちを受け入れてくれるのです。海は、わたしたちの思いの様を、わたしたちに見せているのです。海は、あなたの姿なのです。

## 海の唄

北川静江

海 あなたは いつ生まれたの  
と 聞いたたら

「ずっと ずっと ずうつと昔」

と答えた

誰が 生んだの と聞いたたら

「わからないよ 気がついたときには

そこに 広がっていたんだよ

母さんの そのまた何代も前のお母さんは

神様が だろどろしていた地球を

土と水に 分けてくれたんだって

低い所に 水がたまつて

海になったんだとさ

物凄くきれいな海だった」

神様つて すごいんだね

「そうさ そればかりじゃないんだよ

海は 多くのものを産み出し 生かしてる

魚は何万種類 巨大な鯨やシャチやイルカ

そして海藻や珊瑚

人は船を浮かべ物や人を運ぶことに使ってる

海の生物が人や動物 鳥に食べ物を与えてる

人は海水浴や ダイビングを楽しんでる」

でもこのごろ 悲しそうな顔してるね

と 覗き見ると

「そうだよ 海が荒されて 痛むんだ」

荒される？

「そうさ 物凄いごみが捨てられる

泥水が絶え間なく流れ込む

重油が 青い海を 真っ黒にする

何万年もリンとして生きてきた氷山が

かけ落ちて 流れて 溶けていくんだよ」

どうしたらいいんだろうね

「このまま続けていったら

海ばかりじゃない 地球が危ないよ」

涙を浮かべて 訴えていた

神様に お願いしようか

これ以上 人が海を 汚さないように

「神様に お祈りすると同時に

人に言っておくれ、地球温暖化を 早くストップしなさい

と」

そうだね そして昔々の きれいな海に戻さなくっちゃね

「また子どもたちからあの唄を 聞ける日が来るといいな

海は青いな 大きいな

月は昇るし日は沈む

海に お船を 浮かばせて

行って見たいな よその国ってね」

## 原点に帰る

坂口 良彬

確か、高校2年か3年の時だったのだろう。現都知事の石原慎太郎が「太陽の季節」で芥川賞を取った。それをキッカケとして、当時の若者は海に向かつてロマンを求めはじめた。

当時、映画会社の「日活」は、このブームに眼をつけ、石原裕次郎、小林旭主演の海の映画を撮りだして、それがまたヒットを続けた。

一方政界では、岸信介総理が、日米安全保障条約改定を進めていったため、海へロマンを求めたことと同様に、反対闘争にロマンを求めた人が、1960年夏には30万人、反対を叫んで国会を取り巻いたのである。

海のロマンが後に残したのは、モラルのない権利の主張、性の歯止めなき奔放さであったように、安保反対闘争も、力と力の激突の跡にやりきれない無気力さ、空しさを残したのである。

「太陽の季節」の影響を受ける一方、安保闘争に参加して、その渦の中で倒れた私は、その後神の計画の現れであるかのように、牛込キリスト教会の門を叩いた。マルクス主義に挫折して礼拝に参加した姿は、愛の中にロマンを求めていったそれだったのである。

△△△△△△△△△△

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

△△△△△△△△△△

その年の夏、久里浜で修養会があり参加した。そこには太陽族もおらず、また過激な政治闘争もなかった。静かにすごした修養会で、今の女房と出会った。静か  
久里浜の波打ち際を叩く波は、心を静かにさせてくれた。

牛込キリスト教会の、佐藤陽二牧師からその後続いて指導を受け、大学を卒業する時に受洗して、クリスチャンとしてのスタートをきったのだった。

卒業後、名古屋鉄道に入社して、三河湾、伊勢湾との縁が強くなった。

旅行の仕事に携わっていた時、名鉄海上観光船に旅客を乗せて伊良湖、鳥羽を回り、海から元気を与えられて仕事に励んだ。

教会生活をしながら、会社に勤めることは並大抵の苦勞ではなかったが、海を中心とした豊かな自然は、いつも味方になってくれて励ましてくれた。

今から思えば、海はいつでも自分を抱きかかえ、原点に帰れ、原点に帰れといって心の反復の手伝いをしてくれた。

日本クリスチャンペンクラブに入会して5年目を迎えるが、かつて海が教えてくれたように原点に帰ってみたい。ただ夢中で催事に参加しここまで来るには、いろんな紆余曲折があった。もうだめだと落ち込んだり、なにも書けなくなったりしたが、再び原点に帰って新しい年をスタートさせ、また海を眺めに行きたい。

今度は、海がなにを話しかけてくれるか楽しみにして、文に取り組んでいこう。

## 海の思い出

藤田和範

泳ぎが全くできない私にも、海にまつわる幾つかの思い出がある。

葉山町にある別荘で一夏を過ごした中学生だった頃、私は毎朝のように独りで相模湾に面した一色海岸へ行つた。木立の中の小道を5分も下ると、白砂青松の美しい風景の浜辺に出る。漁から戻ったばかりの幾艘かの漁船に人々が群がっている。とりたての新鮮な魚を求めて集まってきた人達だった。今もその時に見た人達の姿が私の臉に焼き付いている。

こんな思い出もある。小学5年生の頃田尾の叔父に誘われて叔父の友人と3人で鎌倉の材木座海岸へ行つた。ところが、叔父は私をほっておいて2人で楽しそうに沖へ泳いでいってしまったのだ。一人残された私が戸惑いながら辺りを見ると、そこは遠浅で、右前方に小さな中州があった。私は浅瀬に入つて、その中州まで歩いて行った。

泳げない私も海に入れたんだと、その時思わずほくそ笑んだ。夢中になって遊び、ふと気がつくと、海水が膝頭まで迫っている。ハツとして波打ち際の方へ目を向けると、潮が満ちて浅瀬が全く見えないのだ。これは大変だと、私は浜辺に向つて走つた。大波をかぶりながら大声をあげ、夢中で水の中を走つた。泳ぐことができないために私は必死になって走つた。少年の頃の怖かった思い出の一つとして、今も心の中に残っている。

このような思い出もある。何時だったか定かではない

が、ある冬休みに小学生の弟を連れて父の生家である香川県の吉津村へ行つた。岡山県の宇野港から宇高連絡船に乗つて高松に向つたのだが、その日はよく晴れていた上に波も静かで、船上から見た景色が美しく、島影や鷗の飛び交う姿がとても印象的で、今もはっきりとそのときの光景を覚えていて。

ところが、祖父の家で楽しく数日を過ごして帰ろうとしたその日になって、連絡船が欠航するのではないかと思われるほどの強風が吹いた。が、その風もやがて収まり、ようやく出航をしたと思つたら再び風が強まり、まるで嵐のように海が嗥けりだした。来る時に見たあの静かな海からは想像もできない荒れようで、船酔いをする人が続出し、いつもは1時間のところをその日は2時間もかけてようやく宇野港に着いたのだった。そのために私達は東海道本線の急行列車には乗ることができず、トコトコ走る普通列車で帰郷せざるを得なくなつてしまった。忘れることのできない思い出の一つである。

次のような思い出もある。娘が小学生だった頃親子3人で南房総の南端にある館山の民宿に泊まつた。ご主人の田村仁平治さんが大変気さくな人で、話をしているうちに、「よし、それなら舟を出してあげよう」と言うことに私達は相模灘へ向つた。しばらくすると、1頭のイルカが寄つてきた。そしてもう1頭が加わつた。2頭のイルカがさも親しそうに舟に寄り添つて泳ぎ、しかも、ヒョイとジャンプをして見せてくれるのだ。このような思い出を綴っていると、「思い出よありがとう」そう、言いたくなってくる。

## 海を渡る

小川 恵子

六歳の時に淡路島の海岸近くに住むようになった。

よく晴れた初夏の午後、妹を連れて浜辺に行った。引き潮の時刻だったのか波打ち際がずっと遠くにあり、浜辺から数メートルのところは浅瀬の砂が盛り上がり、島のように見えていた。そこへ学校の友達 came たので、三人でその島、実は浅瀬に渡った。夢中で遊んでいて気が付くと島は水の中に沈んでいた。妹をおんぶして友達と浜辺の方に帰りかけたが、岸は遠く、水は深くなる。それまで都会で暮らしていたので、海に潮の干満があるなど全く知らなかった。さっきいたところの方が浅かったのに、と私は浅瀬に戻ろうとした。友達が「あかん」と言いながら私を引っ張り、深みを通って浜辺にたどり着いた。もし友達がいなかったら、どうなっていただろう。海を渡った小さな体験である。

高校へ入る時、大阪へ引越すため、船で海を渡った。以後十数年間、私は島の自然や人を忘れられず都会にはなじめなかった。身体はとくに海を渡っているのに、心はどうしても海を渡れず、古い生活ばかり懐かしがって戻りたかった。洗礼を受けた頃から、やっと都会暮らしを受け容れることが出来、心も海を渡り終えた。

そこで気が付いたのは、私は主に出会うため、海を渡らねばならなかったと言うことだった。他の人はどうか知らない。この私は海を渡り、孤独や苦しみを味わい、

神に会うことが御心だったのだと悟った。

問題のある時は熱心に神に祈り、平安を願う。しかし安定した生活に慣れると、マンネリ化してしまい信仰生活に於いても停滞する。

そこから出なさいと、新しい変化や訓練、使命が与えられる。「そこは安住の地ではない。海を渡ってより安全な場に移動しなさい」とのうながしを感じる。

だが、いつも私は現状にしがみつこうとする。海の深みを恐れ、風や波をおそれて、神の指し示してくださった方向に踏み出せない。そのような時、決まって子ども頃頃の海辺の体験を思い出す。潮が満ちてくる。留まろうと固執するのは危険だと知らされる。そして一歩踏み出す勇気を頂く。何回もこのような繰り返しを経験して今日まで来た。

人生の旅路には渡るべき海や川、登るべき山が多くある。昔イスラエルの民は、奴隷の境遇より神に導かれて脱出し、徒歩で海を渡った。主イエスや弟子たちは、舟でガリラヤ湖を渡った。たとえ主が眠っておられたとしても、同じ舟に居られるだけで、安心してよい。主がともに居られるのであれば、主が導きくださるのであれば、私たちは恐れを抱きつつも、主を信頼して従い行かねばならない。これからも海や川を渡り、山を超えねばならない。そして最後の海を渡れば、そこは安住の地の天国。主にまみえる幸いが待っている。





## 海への出会い

## 内海健寿

私が生まれて14日目に、父が突然咯血をして亡くなった。

母は祖父の暴力に耐え切れず、親戚の産婆、門田マサにつきそわれて松山の叔父の家に避難をした。「主は愛するものをこらしめる」小学校の入学式には祖母がつきそってくれた。最初の夏休みに受け持ちの先生のすすめもあつて、祖父が私と兄を福山郊外にある手代の海岸で保養をさせてくれた。私はおばあちゃん父の母と2人でタクシーに乗って山を越え、海に出た。それが海との最初の出会いだつた。静かで雄大なその風景に私は心を奪われ、圧倒されてしまった。

私達は海岸の近くにあった三軒長屋の一軒を借りた。が、祖母が海岸を歩いていて足を痛め、代わりに母がきてくれることになった。それによつて母は暫く祖父から開放され休息の時を持つことができた。母は当時30歳代で、近所の人達にコロツケの作り方などを教えてあげたりして大変喜ばれた。そこは楽しい別天地、喧騒な町の生活を忘れさせてくれるすばらしいところだつた。私は冷たい海に入り、大自然にふれた喜びを体全体で感じる事ができた。

北九州の石炭を神戸辺の工業地帯へ運んでいるのだから、砂浜に座つて石炭船がゆっくり動いていく風景を眺めていると気分がゆったりとしてくる。が、私はそこで近所の漁師、関さんから大変悲しい話を聞くことになるのである。

ある日、関さんは夜のおかずにと思い、奥さんと2人で漁に出た

のだった。ところがにわか嵐となり、舟が沈んでしまったのだ。関さんは奥さんの体を帯で自分の腰に結びつけていたのだが、その帯がとけてしまったのだつた。関さんは涙を流しながらそのときのことを話してくれた。

「海はおだやかなときもあれば荒れ狂うときもある」

そう言つて、漁師という人生の厳しさを語ってくれたのだつた。

よく晴れた日には、対岸に四国山脈が姿を現すときがある。伊予の松山、そこに親戚の緒方繁造牧師が住んでいた。その一人娘の貞ちゃん、その貞ちゃんがのちに私の愛妻となるのである。

日露戦争の時、日本海海戦で日本はロシアに勝つた。その時外国の新聞は、「日露戦争はキリスト教国ロシアと異教国日本との戦争である」と宣伝をした。ために諸外国はロシアを応援し、その結果日本は孤立することに。そしてそれを打開するために、「日本はキリスト教国だ」、「キリスト教を歓迎する国だ」と宣伝をしなければならなくなり、高官たちが続々と洗礼を受けてキリスト教を歓迎することが国の政策となつた。クリスマス大祝賀会！ 万歳！

だが太平洋戦争では全く情勢が変わり、「ヤソ教、キリスト教は外国の宗教」、「敵国米英の宗教だ」、「キリスト教信者は敵国のスパイだ」といつて徹底的に弾圧され治安維持法の違反容疑で多数が逮捕された。松山教会の牧師であつた妻の父はその弾圧に耐えた。

1945年にポツダム宣言を受託し、平和と人権が回復した。ロマ書5章の3節と4節を読み、わが国の試練の歴史を黙想する。

## 海まで二十六・五キロ

山本 披露武

義父は歩くのが好きな人だった。

「お義父さん、散歩に行きましょか」

私が誘うといつも機嫌のいい返事がかえってきた。

時々コースを変えることもあった。が、最もよく行ったのは江戸川の土手だった。家から700メートルほどのところにあつて、そこまで10分ほどかけて行くのである。土手が上がって少し川下の方へ行くと座るのに格好の場所がある。私達はそこに座って話をするのだがその内容は何時もきまっていた。

「ここはどこ？ 何という川？」

と、まず義父が尋ねてくるのである。

「江戸川です。こちらが埼玉県の三郷市で向こうが千葉県  
の流山市です」

「ほほうー、江戸川かよ！ わしは高知の鏡川と思ちよ  
つたわ。ここに来たのは今日が初めてかいのう？」

「いえいえ、前にも何回か来たことがありますよ」

「そうやったか。年をとると忘れるきにかん。わしも  
今年で65歳やきにねえ」

「ええ！ お義父さん、このぼくが65歳でお義父さん  
は93歳ですよ」

「なに？ おまんが65歳でこのわしが93歳？」  
とても信じられないといった顔をして私を見る。

「そうですよ、93歳ですよ。あと7年で百歳ですよ」  
「そうか、あと7年で百歳か。けんどもまあ百歳までは無  
理やのう。ええとこ生きて95歳か」

と言いながら、98歳まで頑張った義父が笑うのである。

「ほな、お義父さん、もうちよつと行きましょか」

頃合を見て、私が言うと、

「よし、行こう！」

と言って腰をあげ、またすたすたと歩いていく。しばらく行くと「海まで26・5キロ」と書いた標識がある。500メートル毎に立っているのだ。

「海まで26・5キロか。ほんなら今日中に桂浜まで行け  
そうやのう」

義父は高知を歩いているつもりなのだ。

「お義父さん、桂浜まではちよつと無理ですよ」

「そうか、ちよつと無理か。けんどもまあ、行けるとこまで  
行ってみよう」

そう言っでどんどん歩いていく。

介護をしていた頃は毎日が  
大変で明日はどうなるのだ  
ろうと心配ばかりしていた  
はずなのに、今回道歩  
いていると、義父と交わし  
た会話のすべてが懐かしく、  
また楽しかったこととして  
思いだされてくるのである。



## 辻堂海岸で

西山純子

海は荒れてはいなかった。波は殆ど見えず、しかしゆったり押し上げてくる藍みがかったうねりは感じられた。不思議な状況の中で私は砂浜に腰をおろしていた。座っていたというよりは、やはり腰を下ろすという様子があっていたという私であった。

その日、私はふんわりと広げたワンピースのスカート部分と、お気に入りのサンダルが気になっていて、とてもどっかりと座れなかったのだ。

白いパラソルは、19歳の女性にふさわしいお洒落と強い日差しをカバーするものであったのだが、その日の私はその傘さえもが自分に加勢してくれているかのような心を抱いていた。後に友人から届けられた写真の中の自分の表情が、それを語っている。

大学の友人の一人が夏休みに入っすぐに、招いてくれた。夏の海が見たいと言っていた私の言葉を覚えてくれたのだ。友人は私の他に三人位呼ぶと言っていた。友人は大学の合唱団の先輩。男性。招かれたのは同じ合唱団に居ながら会った記憶のない男性が二人、そして少しは知っていた女性一人と私だった。現代なら、さしずめ合コンというところなのだろうか？尤も私は未だにこの合コンという言葉の内容や真意を殆ど知らない。知らない者が例えに出すのは変かもしれない。が、ま、いいだろうということで勝手に使わせてもらっている。先輩が私たち四人を意図的に会わせたいと、計画したとは未だに思えない。そういう気の利いたことをする夕

イブの人ではなかった。夏の海は見たかった私だったが、一人で行こうとは思わなかった。それほどの勇氣も好奇心もない人間だった。そんな私を氣遣って、多分先輩から見ても無難な友人を招いてくれたようには思う。ゆったりとした海のうねりが良かったのが原因であろうか？私はその夏、殆どしゃべらず、どっかり腰を下ろして黙々と砂の小山を作り続けていた四人のうちの一人に惹かれた。



後年、彼は私の生涯の伴侶となった。私は傲慢な人間だった。滅多なことでは男性などに心を動かされたりするものかと考えていた。それまで教会の友人や知人の男性で、私に、好意を持っていてくれた人を感じもした。

私にとってそれは、喜ばしいというより、できればまだ遠くに避けていたことのように思われた。神様にさえ聞き従えず、罪多い私がどうして人を愛せるだろうか、できれば気づかずに通り過ぎたかった。

辻堂の海で出会った彼は、黙々と砂と水で汚れたみんなの靴やサンダルを洗っていた。

室内に上がってからも先輩を手伝ってただ、働いていた。心の中にふと御言葉がでてきた。「愛は忍耐強い。情け深い。ねたまない。自慢しない。高ぶらない・・・」  
参ったなど、なぜかその時私の心は波立ち、やがて輝いていった。

## 不安の波



島田裕子

「白血球値が下がっています。感染症にかかりやすくなっているのを気をつけて下さい」

乳癌の手術から二年目の検査後、医師からそういわれました。抗癌剤の副作用かもしれない。癌になる前は5000もあった値が2000になり、正常値を大きく下回っています。

不安の波がどっと押し寄せてきました。というのは、その半年ほど前に肺炎になったからです。幸い3週間ほどで治りましたが、白血球が少ないので、風邪をひいたらまた肺炎になってしまうかもしれない。それより、インフルエンザにかかったらどうしよう……。予防注射はしましたが、抗癌剤を飲んでいる人は効かないことが多いと注意を受けていました。

もし新型インフルエンザがはやったら……。ああ、わたしはいちばんに感染して死んでしまうかもしれない。

乳癌の再発転移の不安も突然津波のように襲ってきます。リンパ転移があったので、脳、肺、肝臓、骨などに再発転移する可能性が高いといわれている者です。体調のいいときは忘れていますが、頭痛が続くと脳腫瘍ではないか？ 咳が続くと肺癌では？ と心配になってきます。

神さまはいつもわたしに最善をしてくださることを信じていますから、たとえ再発転移が起きても大丈夫と、

たいていは平安な気持ちでいられるのですが、ときたま不安の波がやってきました。

わたしは、不安を抱くことはいけないことだと思ってきました。神さまにしっかりと委ねていけば不安の波に襲われることはないはずだと。不安でたまらなくなるのは不信仰の証拠だと思います。

しかし、昨年教会の修養会で、「人が不安を感じるのは当たり前前のことです。なぜなら神さまがそのように造られたからです」というメッセージを聞いて、救われた気持ちになりました。

「不安を抱かなければ、地震などの災害の備えもしなくなるので（多少の）不安はかえって抱いた方がいいのです。でも、不安にとらわれてはいけません」と聞きました。

いままで不安が襲ってくると、何とかのがれようと必死にもがいていました。でも、そのメッセージを聞いて、不安になる自分を受け入れられるようになりました。

不安の波は、海の波のようです。さざ波のように小さな波のこともありますが、時には津波のように大きな波が襲いかかります。波がきたら逃げないで頭から波をかぶりましょう。力をぬいて、波にもまれて流されましょう。

深い海の底にひきずりこまれる前に神さまがしっかりとつかまえてくださることを信じて。

『主ご自身があなたの先に進まれる。主があなたとともに  
におられる。主はあなたを見放さず、あなたを見捨て  
ない。恐れてはならない。おののいてはならない』



### ミニ小説 海に沈めて

三浦喜代子

みどりは三十年来の親友咲子の顔を覗いている。最近ちよくちよくそうしている。咲子はちつとも気がつかない。みどりを見ていないからだ。目の色が淡く濁って、光りがない。

「あなたの抱えているお荷物はずいぶん重そうね」

ランチに誘い出して、みどりは短刀直入に切り出した。

咲子は一瞬ひるんだが、観念してうっすらとほえんだ。

「ええ、とつても。重たすぎるわ。いつそのこと、海の底に沈めたいの」

「ふーん、海の底にね。海の底ならほんとうに沈められるの？」

みどりはたたみかけてくる。いつもながら、少々強引である。

「そんな気分なの。海の深みに沈められたら、どんなにいいでしょう」

最後の語句はため息であった。コーヒーが手つかずである。

みどりはナプキンで口の端を軽くぬぐうと、

「やってみましようよ」と語尾に力を入れて言った。

「えっ、なにを」咲子は初めて真正面からみどりを見た。

「その重荷を海に沈めるのよ。お手伝いするわ」

翌々日、咲子はみどりに曳きずられるように家を出、押し込まれるように列車に乗り、波打ち際を走り、沖へ突き出た堤防の先まで連れていかれた。

「さあ、あなたのお望みのように、海の底に沈めてしまいなさい」

咲子はバッグから薄い一冊の手帳を取り出した。亡くなって三年になる夫の物である。夫は定年を数年残して、急逝した。

「はーん。犯人はこれね。こんな小さな物があなたの大きな荷物なのね」

「ようやく夫の物を整理する気持ちになって、始めたら、これが出てきたの。見ないわけにはいかないでしょう。そうしたら、そうしたら……」

咲子はしやがみ込んで、全身で泣いた。

「いまでは問いただすこともできない……。あの人を信じたい、でも、疑いが残るの。どうしたらいいの。海に沈めても解決しそうでない……」

「そうでしょうね。あなたの心の問題だわ。信じることじゃないかしら。赦すことじゃないかしら。それだけがあなたを救う道だわ」

「あの人、いつでも正しい人だった……。でも、今はそう言い切れないわ」

「じゃ、ずっとこれを持ちつづけますか」

「いいえ、もう二度と見たくはないのー」咲子は立ち上がる、手帳を差し出した。「お願い、あなたが海の底になつて」

「えっ、私が……。私が、海の底に？ほんとうに？」

咲子はしつかりと頷いた。顔に精気が見え始めている。強い潮風がふたりの髪を舞い上げた。

咲子が先に歩き出した。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

## 天からの恵み

長谷川 和子

今冬は例年にならない積雪、気象庁始まって以来の大雪だという。連日TVのニュースにでてくる新潟県の津南町は亡母の実家があり、今は叔母たちが住んでいる。その地を中心に、20歳位まで父の仕事の都合上、中魚沼郡の十日町・川西村・小千谷町などに移って住んだ。

東北電力の変電所が津南の隣、正面村にあった。その社宅の窓から広い敷地に設置してある変圧器が見える。天井から飽きることなく降り続ける雪によって姿が変形し、雪の像が沢山出来ていく様子を廊下を通る度に見ていたものである。

津南から南に向うこと4キロ、長野県境の秋山郷の麓に中深見村がある。そこに5歳から13歳まで住んでいた。冬は起床後すぐ玄関前の雪掻きをした後カンジキで踏みならして通りまで道をつける。そこから皆が通る道路を隣近所全員で踏みしめて作る。それぞれの家の朝の一仕事である。電線をまたいで学校に通った記憶も今は懐かしい。体育の時間はスキーか雪掻き、学校の屋根から降ろした雪を遠くへ投げる。そうしないと窓が雪で塞がれて教室が暗くなってしまうからだ。それは家でも同じこと。常に雪の片付けを小学生の頃から当たり前のようにして誰もが手伝っていた。肩や腕が痛くなる程の重労働である。

当時は一家に一つの火鉢と炬燵で暖を取っていた。除雪車が来ることもなく、移動はすべて徒歩、1時間2時間は当たり前、物資の

運搬はソリであった。いまでこそTVなどで津南町の大雪の生活が伝えられているが、あのような雪との戦いは毎年繰り返され、自然の営みとして受け止め半年間閉ざされた世界の中で生きていたのだ。

冬が厳しい分、春の訪れは格別である。小鳥のさえずり、木々の若葉が出る頃はあたり一面の緑にいやされる。

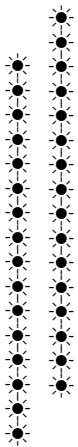
四方山に囲まれて育った私が海を見たのは11歳、6年生の林間学校が柏崎であった時だった。日本海の荒波が打ち寄せ、いつも信濃川で泳いでいた私たちは波が「こわい」と感じたものである。ワンピース風の水着に身を包み岩の上で友達と撮った写真が古びたアルバムに貼ってある。

いつの頃からか心身ともに疲れ切ったとき必ずなぜか「海が見たい」、「海へ行きたい」という衝動にかられたものである。あの広々とした雄大な海を見ているだけですべてが洗い流され元気になるのでは」と思った時期を経て、ふと気づくと「海を見たい」と思わなくなっていた。

近年はあの豪雪地帯の様子がリアルに浮かび、四季折々の風景が思いだされる。まるで田舎の地に立っているような穏やかな気持ちにさせられるのは年を重ねたせいなのか…。

いや、いや、それは神様から与えられた「平安」のたまものではないだろうか。

「私の救いは神から来る」の幸いをかみしめている。



## 鳩（にお）の海

木村隆一

「ピン、ポン」チャイムの音に呼応して、玄関のドアを開けるとB牧師がいた。

「寒いですから、どうぞ中にお入りください」

「教会百年史発刊のときにお借りしていた写真を返しに……」

写真は白黒の5葉である。青春真っ直中に写した学生時代のもの。もうかれこれ50年になるうか。教会学校のキャンプを琵琶湖畔の新畑浜でしていたときの写真である。

その当時ならではの光景を思い出し、青春のころにタイムスリップしてしまった。

そのころ、新畑浜へは長命寺港から和船で行き来することが多かった。陸路もあるが、町中から日野川の堤防を河口まで自転車で行くには、大人でも難渋するコースだったから、近江兄弟社YMC Aの和船ヨルダン丸を借りて渡航していた。艇庫が長命寺港にあったのも都合が良かった。

当時、沖島の漁師さんたちの漁場になっていた新畑浜で、地引き網をされる日と教会学校のキャンプががち合った。

物珍しい網引きがあるというので、プログラムを変更して全員が浜辺に集まり、漁師さんたちの仕事をしていた。

二艘の漁船が沖合から徐々に網を狭めて岸に着くと、

太いロープが砂浜に投げられた。漁師さんの合図で網引きが始まると、浜にいる者は総出でロープに手をかけ、力の限り引っ張る。運動会の綱引きの要領で力の限り引っ張るが、押し戻されることはない。ひたすら引き上げる作業が続く。大人たちに混じって子どもたちも手伝う。

「邪魔だ、あっちにいったら」そんなことは誰も言わない。

いつの間にか見物していた子どもたちもいっしょにロープに手をかけている。黄色い大きな声は大人たちに引けを取らないほど浜に響いていた。

参加しているみんなの顔は輝いていた。張り切っているから大きな声であった。

引き上げられた網に、1メートル有るの白いびわこの大ナマズが一匹と黒い大ナマズも一匹混じって入っている。

「これは、神さまのお使いだ」漁師さんたちは異口同音に言って、ナマズを湖に戻された。

琵琶湖総合開発で、新畑浜には湖周道路が通り、網を引いた砂浜の面影はない。

車を走らせ、路肩に止めて湖面を見つめると、動く水が見える。自分のなかにある見えないものを見る、探ることを教えてくれた湖面にはさざ波が立っている。

生かされているいま、変わらなければならぬこと、変わってはいけないこと、変えねばならぬこと、変えてはいけないことがあるよと、鳩のうみは伝えている。

詩 我慢することはない 玉木功

我慢することはない 我慢には限界がある それでいい  
叫べ、泣け、うめけ  
痛い、ともつと言え、辛い、もう耐えられないと言え  
遠慮は無用 本音を言おう

我慢すれば改善するなんて、そんなに甘くない  
我慢に耐えることが人格提示のしるしと思うな  
情けないと言われてもいい

我慢することが出来なくなったら 叫ぼう  
しゃべろう 愚痴をいおう 弱音を大にしよう  
涙を流そう

手紙に書いてみよう これと思う人に  
聞いてもらおう だが答えは求めないこと

我慢はやめていい 無理に抑えることはない  
孤独な戦い

他人に分かつて貰おうなんて思うな  
もう一度言う 分かつて貰おうなんて  
人は人の中に入り込めない

人の子となられた神以外には  
他者の中には入り込めないのだ

俳句 海

小林 桂子

英虞あごの海 島影淡く 花曇り  
強き音 呑み込む渦や 春の瀬戸  
紅葉散り 潮さしひきの 神の島  
秋の海 蘇そと洞門を辿る 舟の音  
越前の怒濤 弾けて 虎落もがりぶえ笛

俳句 初雪

浅見鶴蔵

初雪に 思いを深め 主に祈る  
雪だるま よいしょよいしょと 作る子ら  
初雪や 赤い椿に そつと寄る



## HP 管理人から 島田裕子

「今年は、J C P のホームページを立ち上げたいと思っています。奉仕して下さる人を求めています」

2004年浜名湖での夏期学校で池田先生が言われたとき、なぜかドキッとしました。

その数か月前に自分のHPを立ちあげたところだったからです。パソコンは初心者でインターネットもよくわからないのですが、高3だった娘に作ってもらい、やっと開設したのでした。自分のHPを管理するだけで精一杯なのにJ C P まではとてできない。きつとパソコンの得意な人が作って下さるのだろうと思っていました。

ところが、2泊3日の夏期学校の間ずっと頭から離れません。かつての私のようにJ C P の名前は知っているけれど、どこでどのような活動をしているのかわからない。知りたいという人がいるかもしれない。HPがあつたらどんなにいいだろうと思いました。

一緒に参加していた娘に話すと、「作ってもいいよ」というではありませんか。嬉しくなってしまい、後のことも考えずに「娘に作らせてください」と夏期学校の最

終日には申し出ていました。

娘が画面を作ってくれたので、それに私が文字を入力していきましました。

「お母さんめちゃんと覚えなとだめよ。更新はひとりでするんだからね。わたしは来年の春には東京で暮らすんだよ。大丈夫なの？」  
と言われ、真つ青……。そうでした。すっかり忘れていました。娘が一人暮らしを始めた後のことを考えていませんでした。

ブログはワードで書くのと同じ感覚でできますが、HPはタグという記号を用いたHTML言語を使って画面の設定をします。画像をとりこんだり、背景や、文字色、大きさ、太さなどもみんなタグで指定して作っていきます。

サンプルを使って作れば更新も簡単なのですが、娘はデザインしながら、ひとつひとつタグを打ち込んで作ったので、タグの意味がわからない者が記号ひとつでも消してしまつと、画面がばらばらにくずれてしまいます。HP入門サイトや入門書を読みましたが、意味の分からないIT用語がずらーつと並んでいて頭が痛くなりそうでした。私には無理なのだと思ひ悩んでいると、「神にとつて不可能なことはひとつもありません(ルカ1. 37)」というみ言葉が与えられました。私がこの奉仕をすることが神さまのみこころなら、力を与えて下さるはずだと思つて必死に

祈りました。

何度も本を読んだり、娘に教えられて少しずつ理解していきましました。その後の更新もなにかひとりでするんですが、最初は何時間もかかっていましたが、今は慣れて、以前の3分の1くらい時間でできるようになりました。みなさまのお祈りと神さまのお助けがあつたからこそです。

HPを担当させていただいて、すばらしい恵みがありました。私は以前から、語彙を増やしたい、表現力をつけたいと願つていました。新しい作品を掲載するとき、同じ物を最低5回は読むことになりました。そのため、自然と他の人の書いた言葉ひとつひとつが頭に入ってきます。それがたいへん勉強になるということがわかつたのです。感謝しています。

開設して1年3か月になりましたが、アクセスは約1600。海外からもアクセスがあつて、クリスチャン・ペンクラブの名が広まつていることは確かです。数名の方がHPを見て入会されたと聞き、とても嬉しく思いました。

これからますますHPが用いられますように、またこの者の健康のためにお祈り下さい。



## 中部ブロックの現状と今後

中部ブロック事務局 坂口良彬

去年は、文集「屋根」を出版することができた。

夏期学校の前から計画があり、夏の暑い時に製作打ち合わせを行って、そのスケジュール通り、水谷節子姉によって本文のワープロ打ちが終了した。表紙、裏表紙、まえがきそしてあとがきの部分は、玉木師が、パソコン技術を駆使して作られた。製作原価は、一冊二百三十円程であった。この文集の特徴は、内容が文集を作るために書かれたものではなく、毎回決まったテーマで、原稿用紙三枚のあかし文章を書き、師の添削を受けたものを文集にしたものである。例会出席者は少数であったが、毎回積み重ねてきた事が形となって現れたのだった。

今年1年も、例会毎の作品を大切に保管して、第2号を出版できるように祈っている。

去年の夏以降からの変化がもう一つある。

それは、例会の会場に使用していた名古屋YMCAの建物が売却されたため、会場を見つけなければならなくなった事である。日本キリスト教団中央教会を借りたりしたが、最終的には、玉木師の教会である東山キリスト教会を会場とさせてもらうこととなった。

その結果として、東山キリスト教会会員の人が二人、レギュラーとして出席することとなった。少数の会であったのが、とたんに賑やかになり、会の取り組みにも力が入ってきた。

そうしている内に文集「屋根」の出版があり、ステップとなって盛り上がってきたのである。

夏期学校に申し込まれ、欠席されたひとりの姉も、体調が不十分なため会に出席することはできないが、通信による文章添削に参加されて例会の度に郵送で添削を受けている。

中部というところは、関東、関西に比べて地味な土地柄で、何か行かう時も時間がかかるが一度根がつくとしぶとく、また東京、大阪へ行くのにも時間がかからないという長所があるため、それを利用して一步一步前進していくつもりである。

### 編集委員から

◆七十歳をすぎて習ったパソコンの腕を買われ(?)前号から編集のお手伝いを。と言っても使えるのは左右の人差指各一本。その姿はまるで犬が大海を泳いでいるような、それはもう何とも可笑しな格好。それでもJCPのお役に立てばと大張り切り。高度な仕事はできなくても、期日だけはと  
思っ、  
懸命にキーを叩きました。

山本 披露武

◆時には、肩を張らずに多くの方が投稿できるテーマをと、編集委員が提案しあつて今回の課題「海」は決まりました。神様のご計画の中で、多面から視点を与えられた「海」が感謝の内に紡がれました。  
次回はあなたも投稿を！ 西山純子

◆今、良寛和尚に熱中しています。ことに、晩年の貞心尼との相聞歌(と勝手に解釈しています)は、七十歳を超えてなお、かくしゃくとしたものを感じています。いつまでも、若くありたいと思いつつ。

**関東ブロックから 書記・理事 西山純子**

関東ブロックでは、原則として奇数月（1、3、5、9、11月）が例会。偶数月は詩歌・児童文学の会が定着してきました。2005年度は、文章を紡ぐ基本の学びの上に、『自分史を書く学び』を始めました。例会では、一部礼拝で池田勇人理事長のメッセージをいただき、二部学びと交わりの中で、毎回課題のもとに担当者が立ち、その後グループ討議があって出席者1人ひとりに参加の場が与えられるのも感謝です。詩歌・児童文学の会では、それぞれに、発表者、テキスト、課題があり、毎回詩作に創作に実りと前進を与えられています。

三浦喜代子姉が「美しき姉妹たち」を出版されました。11月に出版記念会、新年には読書会も開くことができました。

2006年度は、『私の文章活動』とテーマして、会員の発表と学びを展開していく予定です。5月頃に文集「自分史」を発行予定しています。高齢の方、病臥の方に、祈りと寄せ書きなどお送りしたいと願った新春でした。

**関西ブロックから 関西ペンの昨今 事務局 小川恵子**

2004年秋の「関西ペンの声」巻頭言で久保田先生は「一つの重要な提案」をなさいました。それは、会員の協力的分担体制を確立することです。先生が第一線のリーダーを引退なさることを念頭に、これからの関西ブロックのあり方を方向付けられたものでした。

2005年は、事務局（総括責任者）、会計、編集、例会の各担当を決めてスタートしました。例会の場所も大津の他に大阪近郊に廉価で借りられる施設が見つかりました。夏期学校は関西ブロックの担当でしたが、今まで久保田先生に多大のご負担をお掛けしていたことに気付かされ申し訳なく思いました。

久保田先生はお疲れのため、夏期学校が終わればしばらく休養したいと仰っておられました。9月に長原兄も事務局を辞任したいと表明され、何も分からない私が事務局を担当することになりました。11月と2月の例会、総会を無事に終えました。出席者は滋賀県の方が遠くなったためか減少しているのが今後の検討課題ですが、例会・会計とも順調です。会報の発行は遅れましたが、間もなく出来上がります。方向は間違っていないことを確認しあいました。皆様のお祈りを感謝致します。

下記の方々があかしの文章活動の一役としてインターネット上にブログを開設し、日々文章を掲載しています。インターネットのできる方は積極的にアクセスしましょう。

\* 島田裕子姉【生かされて】アドレス <http://blog.goo.ne.jp/gurimu3181/>

\* 三浦喜代子姉【希望の風】アドレス <http://kibounokaze.jugem.jp/>

\* 藤本優子姉【優子の部屋】アドレス <http://yukochappy.seesaa.net/>

本部事務局便り

三浦喜代子

2006年がスタートしました。新しい年をお与えくださった主の貴い聖名を賛美します。この年、我がJCPが主から託されたよき使命を十分に果たせますように、お互いに祈り、励みましょう。

新年に当たっての祈りの課題

▽理事会の上に主の導きと祝福がありますように。また、理事一人一人が霊肉ともに支えられ、ふさわしい働きができますように。(池田勇人理事長・玉木功副理事長・久保田暁一・川上与志夫・長谷川乃武男・浅見鶴蔵・西山純子・三浦喜代子各理事)

▽各ブロックが祝福されますように。ブロック事務局と担当者が支えられますように。

(札幌・日野栄子、関東・三浦喜代子、中部・坂口良彬、関西・小川恵子)

▽会員一人一人のあかしの文章活動読み、学び、書き、広げ、本にするが強められ、祝されますように。

▽開設したホームページが多くの方々に利用されますように。アドレスは表紙に。

▽あかし文章に関心を抱く方々が起こされ、新規会員が与えられますように。

昨年度の会員状況(年会費納入の方)

- \*北海道・2名
- \*関東・37名
- \*中部・4名
- \*関西・14名

合計57名

\*前年度の会費未納の方、至急お願いいたします。

\*高齢のため、JCP活動ができにくくなった方々がおられます。お祈りしましょう。山川保吉氏、武井しな子氏、長谷うた子氏、近藤正子氏、大森スエ氏

◎あかし新書の発行について

昨年の理事会において、次のあかし新書は、『生かされている喜び』と『志に生きる』を合わせて一冊にし、二〇〇六年今年、発行することになりました。

創設されましたJCP出版部において川上与志夫理事を中心に、進めてまいります。

◎新入会員紹介

島本 耀子氏 (神奈川県在住)

お願い

▽本年度の年会費を受け付けています。郵便振替あるいは現金書留でお願いいたします。  
▼JCPのパンフレットや過去に出版したあかし新書お入用の方、また宣伝のために使いたい方はお申し出ください。

編集委員から

★ 昨年初めの12号は主題【春】による会員の作品特集号を作りました。それに準じて今年も作品集にしました。主題は【海】。

昨年にまさる多数の作品が寄せられ、20ページと、過去最大のレターになりました。JCPの本領発揮です。うれしいことです。今回も編集委員たちの力を寄せ合って、手作りになりました。

各ブロックから詳しい活動状況が発信され、JCPの一体感を強く感じます。紙面作りのアイデアがありましたらお聞かせください。

三浦喜代子

★ 広さといい大きさといい深さといい、海は私たち人間をはるかに越えています。島国に住む日本人にとって、海は身近です。海にまつわる作品が多く寄せられました。読んでいるうちに「わたしの海物語」を書きたくなりました。

楨 尚子